

装飾品から日常使いの道具まで 多様さが魅力の香川漆器

伝統の技法を現代に生かす やわらかな発想と豊かな表現力。

江戸時代より藩主の保護と理解のもとに発展してきた香川漆器。ことに江戸時代後期の漆工職人・玉楯象谷たまかじょうこくは、タイや中国の技術を研究して独自の技法を開発したことで、「香川漆器の祖」と呼ばれます。現代まで受け継がれるその技術は、多彩な技術、豊かな色調に加え、種類の豊富さも大きな特徴。この地で伝統の技法を受け継ぐ川口屋漆器店の三代目として生まれた佐々木康之さんは、現代のライフスタイルにもなじむ新しい漆器の提案でも注目を集めています。

「香川に漆器あり」を 広く伝えたい

漆器といえば一般的に、黒か朱に、蒔絵が煌めく贅沢なもの…そんな固定されたイメージをリセットしてくれるのが香川漆器といえます。しっとりとした艶、深みのある味わいという漆の魅力はそのまま、表情も技法もアイテムも、実に多様性に富むからです。

江戸時代より日本有数の漆器産地となった香川県では、独自の技法を創案し、日用品から家具、芸術品

まで、暮らしのあらゆる道具に応用してきました。1976年には独自に確立され伝え継がれてきた「蒔まき」「蒔「彫ぼり」「彫「存清ぞんせい」「存「後藤塗ごとうぬい」「後「象谷塗しょうこくぬい」の五技法が、四国で初めて国の伝統的工芸品の指定を受けています。

川口屋漆器店も、そんな多彩な漆器を幅広く手がけてきた工房のひとつ。「祖父が終戦後に興し、父が二代目に。物心ついたときには20人近い職人さんがいて、さまざまなお漆工芸品を手がけていました」と語る佐々木康之さんは、大阪の

大学を卒業し20代前半で家業へ。それまで生活のなかに当たり前にあった漆器に職人として携わり、全国の物産展に向くようになって初めて「香川漆器」があまり知られていないことにショックを受けたといいます。さらに危機感をおぼえたのは、同世代の若者たちの多くが



日常に溶け込みながら、美しいデザイン、使い勝手のよさで心を豊かにしてくれる「87.5」の食器たち。ブランド名は、工房と店舗が四国霊場の八十七番目と八十八番目のちょうど中間に位置することに由来します。

現代のライフスタイルに 心地よく馴染む漆器を

目指したのは、若い人でも生活に取り入れたいと思えるような新しい漆器づくり。香川漆器が受け継いで

漆器に関心を持っていないことでした。「でも、展示会で初めてご覧になった方が、感動してくださることとは確か。もっと間口を広げて、いろんな層の人々に知っていただく機会を増やさなければ、と強く思いました」と若き日の決意を語ります。



香川漆器伝統技法のひとつ「蒔」の技法による花生。何度も塗り重ねた黒漆の上に模様を線彫りし、そのくぼみに色漆を象嵌してつくられます。研ぎをかけ整えたつややかな表情からも、奥深い味わいを感じられます。



香川塗の創始者・玉楯象谷の名を取った技法「象谷塗」は木地に漆を繰り返し塗り、最後に真孤まこもの粉をまいて仕上げます。堅牢でキズが目立ちにくく、使い込むほどに渋みが増します。

末長く愛でられる 漆器の魅力

「漆器は扱いが難しいと思いつている方も多いのですが、まったくそんなことはありません」と佐々木さんは語ります。「木の素材に漆を塗り重ねているので、耐久性にすぐれ、熱も伝えにくいので熱いものを入れる器に最適。食器としてはやや高価に感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、修繕もできるので、長く愛着を持って使っていただけます」という言葉からも、使う側の日常に寄り添う誠実さがうかがえます。

根底にあるのは、香川漆器の魅力。余すところなく伝えたいという思い。その情熱は確かに、香川漆器の世界をより豊かに広げています。

きた技術、とりわけその豊かな色彩は、モダンな表現にも向いています。さらに木地づくりから一貫して関わっていく香川漆器ならではの製法も、プロデューサーとして自由に創造性を発揮することにつながりました。そうして発表したシンプルなフォルムにポップなカラーが目を引き、作品たちは、これまでにない香川漆器として広く注目を浴びることに。手応えを感じた佐々木さんは、オリジナルブランド「87.5」を創設。工房に併設したショップやオンライン販売、イベントにも積極的に参加し、妹さんとともにファン層の拡大に努めています。



香川漆器伝統技法のひとつ「存清」による扇面飾り。華やかな色漆に文様や柄を描き出し、その輪郭に線彫りを施して金粉や金箔で際立たせたもので、あでやかな色使いに繊細なきらめきが目を引きます。



87.5 ハチジウオナナテンゴ 川口屋漆器店 佐々木 康之氏 Sasaki Yasuyuki

1946年創業の川口屋漆器店に1976年に誕生、2000年家業に入る。伝統技法を受け継ぐ傍ら、香川漆器の新たな取り組みとしてニューエイジ向け商品開発プロジェクトを開始。2012年「うどん県アートコンペティション」大賞を皮切りに、数々の受賞に輝く。2015年、オリジナルブランド「87.5」を立ち上げさらに人気を高めている。現川口屋漆器店代表の父・佐々木敏晴氏は、香川県漆器工業協同組合理事長を務める。

